

優 秀 賞

「 図書館という幻想的な世界 」

経済学科 2年 チワワ (P.N.)

図書館と聞いてどのような場所を思い浮かべるだろうか？

答えは十人十色、人それぞれだろう。

私は大学の図書館などによく行っている。

本というのはその中にそれぞれの本だけの物語があり、その物語を楽しむことこそ醍醐味ではないだろうか。

おまけに教養がついたり、読解力がついたりの良いことづくめではないか。

図書館という場所は、勉強をしたり、専門的な書物も目にすることだってでき、

そのうえ静かな場所なので、ゆっくりと本を読むことができるので

実にすばらしいと感じた。

大学の図書館の中でも古い本や書物などが私を幻想的な世界へ誘った。

基本的に本の最後の方には「返却期限表」という小さな紙が貼られており、

古い本や新しい本だって同様だ。

返却期限表に日付の判子が押されていないのを見ると、

まだ誰も借りていないという新鮮な気持ちと、自分がその本を借りる1人目という新鮮な気持ち、なんとなく違うこの2つの新鮮な気持ちがまとわりつく。

そこで私は、かなり昔のものだろうと思う本を何冊か手に取り、

何気なく返却期限表を見てみると、“39”、“43”、“53”と書かれていた。

つまり昭和39年などということだ。

つまり、私が借りるのであれば、誰かがその本を手にとって読んだりしていたとしても借りていなければ約40年、50年、昭和39年となると約60年といった長い年月越しに借りることになるのである。

私はかなり歴史を感じた。まるで半世紀前にタイムスリップしたかのよう。

その人たちが何のためにその本を借りたのだろうか、今どうしているのだろうか。

考えてもわからない。でも、そういったことをほんの少しだけでも自分で感じたり、想うことで、なんだか心がそわそわするような、ちょっぴり幸せな気持ちになる。

今のご時世だからこそ、日常にちょっとした幸せを感じてほしい。